

きれいな心のままで

茨城県 日立市立久慈中学校 1年
五来 拓斗（ごらい たくと）

辰ちゃんは、ぼくの生まれた時には家にいた。庭の草取りやゴミ出し、店のかたづけなどをしていた。辰ちゃんは片手分しか数えられない。おつかいを六個以上たのむと五個までしか買ってこられなかった。辰ちゃんは、知的障害。五十年以上前に身よりのない辰ちゃんを、祖父が働き手として、引き取った。六十才を過ぎて、三十キロの米袋を軽々と持ち上げた。わが家で一番の力持ちだった。

母から聞いたのだが、辰ちゃんは兄やぼくを大好きだったという。赤ちゃんの頃、母は芝生の上に歩行器を置き、ぼくらを乗せて遊ばせたらしい。辰ちゃんは、庭仕事をしながら、ぼくらを見て喜んでいたので。ぼくが幼稚園生になると庭で捕まえた生き物をプレゼントしてくれた。サワガニ、カマキリ、チョウチョウ。ナナフシにカミキリムシ。カナヘビやミミズ、いも虫にムカデまで持ってきた。ぼくらが水あそびをする時は、ぼくの肩にやさしくじょうろで水をかけてくれた。顔にかからないよう注意しながら遊ぶ様子に母は辰ちゃんの優しさを感じたと言っていた。

辰ちゃんは、物が捨てられない。ゴミに出したはずの食器や古着を自分の部屋に持って行ってしまい、父に叱られた。でも、物のない時代に育ったから仕方ないんだと母は言っていた。それから、辰ちゃんはいしん坊。みんなと同じ食事をしているのに、食べたい欲求がいつもあったそうだ。ビワの実がなると危ないのに木のぼりをして取って食べた。柿がなると、渋柿なのに平気で食べて叱られた。

辰ちゃんは、兄を「りいくん」ぼくを「たあくん」と呼んだ。どもりながら

「とととともだちできたのけ」

「かっかっかわいいなあ。おりごうだね」

と、頭をなでながら言った。小さい頃は、ぼくらと遊んでくれた辰ちゃんだったけれど、小学生になると、ぼくらが辰ちゃんと遊んであげるようになった。かけっこをする時は辰ちゃんが転ばないようにスピードを出さないで走った。キャッチボールは辰ちゃんが取れるようにやさしく投げた。風が吹くと辰ちゃんと一緒に風に当たった。アイスと一緒に食べた。ぼくは、お菓子をうれしそうに、大事そうに受けとる辰ちゃんが好きだった。

ある日、辰ちゃんがいなくなった。病気で入院したらしい。とても寂しかった。わが家のリビングには、辰ちゃんとぼくらが一緒に笑っている写真がある。兄は

辰ちゃんを心のきれいな人だと言った。母は、無心に働く立派な人と言った。父は、辰ちゃんも大切な家族だと言った。

ぼくは、障害者という呼び方はあまり好きではない。辰ちゃんは知的障害者だったけれど誰よりもきれいな心を持っていた。働いて食べて、一生懸命に生きていた。誰も傷つけない。生き物が大好きで、小さな命を大切にしたい。いつも笑っていた。

ぼくは、辰ちゃんのような人が世の中にはいっぱいいると思う。ちゃんと役に立っているし、働いているのに差別されてしまう。とても悲しい事だ。辰ちゃんは誰も傷つけないと言ったが、ぼくも人を傷つける事ができない。意地悪をした相手に嫌な気持ちがあっても、傷つけるような言葉をぶつけられない。ぼくは、自分が弱いからだと思っていた。けれども、母は優しい心の辰ちゃんや兄と一緒にいたからなんだと言った。辰ちゃんは子供のような人だったので、時々叱られた。でも、父や母は小さな子供に話すように、分かりやすい言葉で叱った。叱られた辰ちゃんは、シュンとなったが、お菓子をもらおうと元気になった。ぼくの家族は、弱い人を傷つけない。

いつの間にか、ぼくの心にも同じ気持ちがしみ付いていた。

最後に、この作文を書くために基本的人権について調べてみた。憲法には、人間が人間として基本的に持っている権利は侵害される事なく尊重されるべきであると書かれていた。また、平等権とは差別されない権利と書いてあった。今の日本はどうだろうか。障害のある人を差別していないだろうか。

ぼくは、辰ちゃんに出会って無心に働く事のすばらしさを知った。きれいな心そのまま生きる辰ちゃんをステキだと思った。障害者を弱者というが、「弱者」ではなく、「弱い人」とぼくは言いたい。世の中の人々が、弱い人に優しくなったらいいなあ心から願っている。ぼくは、「助けが必要な人」をサポートしてあげられる大人になりたい。